

表彰の理由

(財)庭野平和財団(庭野日鑛総裁、長沼基之理事長)は、「第17回庭野平和賞」を韓国の宗教指導者、姜元龍(カン・ウォンヨン)博士(82歳、キリスト教)に贈ることを決定しました。世界125カ国、約1,000人の識者に推薦を依頼し、仏教、キリスト教、イスラム教など7人で構成される審査委員会で厳正な審査を行い、決定されたものです。

カン博士は、韓国宗教界を代表する指導者の一人であると同時に、国際的な諸宗教対話活動のリーダーとして活躍されてきました。また韓国国内での社会正義の推進をはじめ、文化・芸術の振興など、実に幅広い活動を展開してこられました。その宗教的信念に裏付けられた卓越した行動力は国内外で高く評価され、1998年にはMANIF主催の世論調査を通して選ばれた「韓国を動かす24人」の一人にも選出されています。

カン博士は、これまで韓国キリスト教学生協議会理事長、韓国キリスト教協議会議長などを歴任。1962年には、韓国クリスチャン・アカデミーを設立し、院長に就任しました。以来、同アカデミーの諸宗教対話委員会を通じ、韓国国内にある六大宗教間の対話集会を100回以上開催。1986年、KCRP(韓国宗教人平和会議)の創設を実現しました。同年、ソウルで開催されたACRPⅢ(第3回アジア宗教者平和会議)では、KCRPが中心となって大会を成功に導き、カン博士はACRP議長に選出されました。

その後、国際的な諸宗教対話活動に対するカン博士への期待は、ますます大きくなっていきました。ACRP実務議長、WCRP(世界宗教者平和会議)国際委員会会長、同執行委員に選出されたほか、昨年(WCRPⅦ(第7回世界宗教者平和会議、ヨルダン・アンマン)では、大会準備委員会委員長も務められました。また、アジアキリスト教協議会(CCA)、世界教会協議会(WCC)など、さまざまなレベルの協議会で、重責を担ってこられました。

一方、カン博士は、韓国国内での社会正義にも、深い関心と情熱をもって取り組んでこられました。1970年代の軍事政権下にあつて、積極的に人権擁護、民主化のための社会運動に参画し、民主回復国民会議代表委員としてリーダーシップを発揮されました。また、平和実現のため、数百回に及ぶ対話集会を開き、民主化、人間化、環境保全、工業化における社会正義などをテーマに、国民の意識向上を図ってきました。南北朝鮮の統一運動、労働争議の和解

交渉、言論の自由の実現、女性や労働者などの教育プログラム推進など、カン博士は非常に広範囲にわたる活動を行ってこられました。1979年、反共法違反容疑で軍事政権下のKCIA（韓国中央情報部）によって逮捕・収監されたのも、カン博士の韓国社会における影響力の大きさを象徴する出来事と言えましょう。

以上の活動に加えて、カン博士の歩みの中で注目すべきことは、文化・芸術（放送、演劇、映画、伝統文化）の振興に対する貢献です。ご自身がこれらの分野に造詣が深いこともあり、アジア映画祭（ソウル）審査委員会議長、韓国身体障害者大会長、世界演劇祭（ソウル）大会長、ソウル・オリンピック文化芸術行事推進委員長、同オリンピック国際学術会議委員長などを歴任し、文化・学術・芸術の振興を通じた平和運動にも尽力してこられました。

カン博士は、著書『荒野より』の冒頭、自分自身を政治家、社会運動家、聖職者でもない「荒野で叫ぶ声」だと述べられています。荒野とは、「悪霊たちが暮らすところ——つまり経済第一主義、権力万能主義、狂信的宗教を最高の価値とする世界」を指します。「荒野で叫ぶ声」であるカン博士は、言われます。「荒野を支配する悪霊たちを追放し、人間と生命を最高の価値・目的にしていかなければならない。この目的（人間と生命）が、物質・権力的手段にならないよう、われわれは、愛、正義、平和の実現に向け全力を尽くさなければならぬ」。

この信念のもと、カン博士は82歳になる今日まで、まさに愛、正義、平和のために一生を捧げてこられました。庭野平和財団は、こうしたカン博士の長年にわたる平和活動と、その宗教協力を基盤とした平和への献身に対して深く敬意を表し、またこれまでの多大な功績を顕彰すると共に、さらに多くの同志が輩出されることを念願して、ここに「第17回庭野平和賞」を贈るものであります。